

国語科を通じて育成する資質・能力 の在り方・示し方等について

- 「目標」等、「見方・考え方」、「高次の資質・能力」の在り方について (ver.3)
- **学習内容に関する課題を踏まえた検討～知識及び技能に関して～**

論点 1 語彙を豊かにすること

論点 2 読書習慣の形成

論点 3 話や文章に含まれる情報の扱い方

論点 4 言語文化の継承・発展



(2) 学習内容に関する課題を踏まえた検討の方向性

①国語科として育成が求められる資質・能力のあり方

A. 人生を豊かにする語彙の獲得・読書習慣の形成

- 子供の言語経験（身近な大人との会話や読み聞かせなど）の多様化と教育格差との関連が指摘されている中、子供たちがより豊かな人生を実現するためには、語彙を豊かにし、自立した読書習慣を身につけることが重要

I. 主体的な社会参画のためのコミュニケーション能力の育成

- 異なる価値観をもつ他者と建設的にやり取りするために、目的や場面、意図に応じて、自分の思いや考え、情報等を効果的に伝えたり、相手の思いや考え、情報等を的確に理解したりするとともに、合意形成に向けて話し合う力を育てることが重要

U. 社会生活の質を高めるための文章理解・活用能力の育成

- 情報社会では、目的に応じて文章の読み方を工夫し、内容を正しく理解した上で、評価・熟考し活用する力を育成することが重要

E. デジタル・情報社会で氾濫する誤情報に対応できる能力の育成

- デジタル化の負の側面も顕在化する中、多様な情報や意見（生成AIによるものも含む）の中から、正確で信頼できるものや、根拠や論理の展開が妥当なものを見極める力を育成することが重要

O. 我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を継承・発展させる態度の育成

- グローバル化が進む中、我が国の言語文化に親しみ、愛情をもって享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を育成することが重要

②左記の資質・能力を育成するための指導のあり方

A. 言葉で思考を整理したり深めたりすること

- 語彙を豊かにしたり、適切な語句を用いて思いや考えを表現したりすること（①A）に課題《語彙》（※参考資料3参照）

(例)

- 既知の語句(漢字を含む)と関連付けながら未知語の意味を理解して語彙を豊かにする学習や、紙やデジタルの辞書等を活用して類義語等の語感の違いを考えながら適した語句を選んで表現する学習の充実

- 読書により考えを広げたり深めたりする習慣の定着（①A）に課題《読書》（※参考資料7参照）

(例)

- 授業での読書から、授業外の時間も使って長期的に自らの興味・関心等に応じて様々な文章を読んで考えをもったり深めたりする自立的な読書への移行を促す系統的な学習の充実
- 読書の足跡をデジタル等で記録して振り返り、読書の意義や効用を実感する学習の充実

- 話や文章の内容と既有知識等を整理して結び付け、考えをまとめること（①イ・ウ）に課題《情報の扱い》（※参考資料3参照）

(例)

- 話や文章から取り出した情報や言語化した知識や経験等を、図表等を活用して構造的に整理し、情報同士の関係を明確にして考えをまとめたり深めたりする学習の充実

イ. 目的や場面に応じたコミュニケーション

- 目的や場面に応じて適切に話したり聞いたりして考えをまとめること (①イ) に課題《話す・聞く》(※参考資料4-1参照)

(例)

- 目的や場面に応じた話し方・聞き方を踏まえて、伝えたいことを明確にして構成や展開、表現の仕方などを工夫して話したり、論点を整理しながら話を聞いたりして考えをまとめる学習の充実

- 自分の思いや考えを適切に伝えられるように工夫して文章を書き、整えること (①イ) に課題《書く》

(※参考資料4-2参照)

(例)

- 目的や意図に応じた文章の書き方を踏まえて、伝えたいことを明確にして構成や展開、表現の仕方などを工夫して書き、文章全体を整える学習の充実

ウ. 目的に応じた文章理解、情報の評価・熟考

- 目的に応じて文章を読み、自分の考えをもつこと (①ウ) に課題《読む》 (※参考資料5-1参照)

(例)

- 認知心理学等の知見も踏まえつつ、文章の意味理解のプロセスや目的に応じた読み方(必要な情報を得る、批判的に吟味する、文章世界に没入するなど)を踏まえて文章を読み深め、根拠に基づいて考えを表現する学習の充実

- 話や文章に含まれる情報の信頼性や情報同士の関係の妥当性を確かめること (①エ) に課題《情報の扱い》(※参考資料5-2参照)

(例)

- 情報の事実関係や主張を裏付ける根拠の適切さなどについて、インターネット検索や学校図書館等を活用して複数の情報を参照しながら確認し、矛盾を見つけて対処する学習の充実

エ. 我が国の言語文化を継承・発展させる態度

- 我が国の言語文化の特質を理解し、その担い手として継承・発展させる態度 (①オ) に課題《言語文化》 (※参考資料6参照)

(例)

- 小中学校での古典に親しむ学習から高等学校での古典への理解を深める学習への系統的な接続の改善
- 我が国の伝統的な文字文化を踏まえつつ、近年の文字文化の変化に応じる効果的な学習の充実

(3) その他

- デジタル学習基盤を支える文字入力への扱い

(例)

- 小学校低学年で学習の一部に、キーボードに触れてローマ字で入力して取り入れることを通じた、国語科や他教科等で育む言語能力、情報活用能力の向上

- (2) ②イ・ウ、(3) については今後別途検討
- 「近年の文字文化の変化に応じる効果的な学習の充実」についても今後別途検討

論点2 思考力・判断力・表現力等の整理

令和7年11月28日
第3回国語ワーキンググループ
資料1 P.7

顕在化している課題

- [思考力、判断力、表現力等]が細切れに教えられている傾向
- 言語活動例と[思考力、判断力、表現力等]の事項が別々に示され、対応していないものもある（P12参照）
- ➔ 児童生徒がどのような思考・判断・表現をする姿を目指すのかが分かりにくく、一連の流れとして“考えて・判断して・表現する”学びになりにくい

思考力・判断力・表現力等を、領域ごとに言葉を使う目的(仮称)を明示して整理してはどうか

改善のイメージ（P10参照）

次の2つの観点から、国語科で育成すべき思考力・判断力・表現力等を、具体的な学習活動と一体的に、言葉を使う目的(仮称)ごとに整理する

- ① 児童生徒が言葉を使う目的(仮称)に応じて主体的に試行錯誤しながら思考・判断・表現する学習を促し、深い学びを実現する観点
- ② 教師が、育成を目指す資質・能力を明確にして単元を構想し、指導と評価の一体化を実現する観点

論点3 知識及び技能の整理

顕在化している課題

- どの[知識及び技能]を思考・判断・表現の過程で活用することに重きを置くのか、取り立てて学習することに重きを置くのかが明確に示されていないため、具体的な指導がイメージしづらい。さらに、言語文化の継承や価値観の形成そのものを知識・技能として身に付けたり、理解したりさせる指導が不十分

知識・技能を、具体的な指導がイメージしやすいように再整理してはどうか

改善のイメージ（P11参照）

いずれの側面の知識及び技能も、思考・判断・表現に生かしたりそれを支えたりするものであるが、

- ① 各領域の学習の過程で生かし深める側面と、
- ② 各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面の二側面から、以下のように整理する

①各領域の学習の過程で生かし深める側面

- 単なる知識の暗記（量的な蓄積）で終わらせず、思考・判断・表現の学習活動を通して、知識を繰り返し運用・統合することで、深い理解と定着を図る

※必要に応じて、特定の事項を取り上げたりまとめたりして指導するなど、指導の効果を高める工夫に留意

②各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面

- 文化的な知識や態度、教養を身に付けることの意義を踏まえ、そのものの習得を目的とした学習を通して、各領域の学習の質を高めるとともに、自己の形成、社会生活の向上、文化の創造と継承を実現を図る

※必要に応じて思考・判断・表現の過程で活用できるよう指導するなど、指導の効果を高めることに留意

参考：中学校学習指導要領 第2章 第1節 国語 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

- (3) 第2の各学年の内容の[知識及び技能]に示す事項については、[思考力、判断力、表現力等]に示す事項の指導を通して指導することを基本とし、必要に応じて、特定の事項だけを取り上げて指導したり、それらをまとめて指導したりするなど、指導の効果を高めるよう工夫すること。

※小学校、高等学校でも同様の規定

論点1 語彙を豊かにすること

議論の前提

1. 現状

- 現行の学習指導要領では、「語彙」について、
 - ✓ 意味を理解している語句を増やすこと
 - ✓ 話や文章の中で使いこなせる語句を増やすこと
 - ✓ 語句の意味や働き、使い方への理解を深め、語感を磨き、語彙の質を高めることが示されている。
- 授業では、辞書を引いたり、文脈から意味を考えたりする活動が広く行われている。

2. 課題

- 一方で、理解している語句の量が不足しており、考えや思いを伝えるのにふさわしい語句を選んで使うことには課題が見られる。
(P7 参考資料参照)
- その背景として、語句の意味調べや語句の暗記に重点が偏り、
 - ✓ 語句の意味や働き、使い方を吟味する過程で考えを深めたり感じ方やものの見方を広げたりする
 - ✓ 語句の選び方を工夫して思いや考えを効果的に伝える
 - ✓ 新しく出合った語句と、既に知っている語句との関係を考える
 - ✓ 同じような意味や働きをもつ語句相互の共通点や相違点に着目して使い分けを考えるといった学習が十分ではない実態も見受けられる。
- 基盤となる言語能力の観点から、語彙をめぐる次のような課題が指摘されている。
 - ✓ 日常的に用いられる語句（例：火、煙、沸騰）は、生活経験の不足等により、実感と結び付いていない場合がある。（いわゆる「記号接地」の問題）
 - ✓ 教科横断的に学習で用いられる語句（例：比較する、整理する、振り返る）は知っていることが前提とされやすく、その意味や使い方が必ずしも明示的に指導されていない場合がある。
 - ✓ 教科特有の意味をもつ語句（例：仕事、力、変化）は、日常的な用法や意味との違いが十分に意識されないまま学習や指導が行われている場合がある。

こうした語句に関する課題が重なり合うことで、教科書を自力で読み取ることが困難になっているとの指摘がある。（P18 参考資料参照）

論点 1 語彙を豊かにすること



具体的論点

3. 論点

- 語彙の学習を、「語句を知る学習」から「意味や働き、使い方を吟味しながら考え、感じ、表す学習」へどう広げていくか。
- 個々の語句の意味理解に留まらず、語句相互のつながりや広がりをつかえ、自分の語彙を豊かにしていく学びを、どのように位置付けるか。

4. 改善方策

(1) 改善の方向性



- 生成AIが飛躍的に発展する中、人間ならではの実感を伴った理解や思考、表現を支える語感を磨き、語彙を豊かにするための学習として、主に次の二つの方向性の学習を充実させることとしてはどうか。
- ① 文脈の中で語句を「使い」ながら、主に語感を磨く学習の充実
 - ・実際に話したり聞いたり書いたり読んだりする場面で、辞書等を活用しながら未知語に限らず自分が着目した語句の意味や働き、使い方を理解したり考えたりすることで、話や文章に対する解釈を深めたり、より適切な表現を工夫したりする学習
- ② 語句同士の関係を「理解し」ながら、主に語彙を豊かにする学習の充実
 - ・個別の知識の集積で終わるのではなく、それらを関連付け、「語句のまとめり」に着目して「語彙」に関する概念的な理解を深める学習

(2) 記載の改善イメージ







- このような学習の方向性を明確にし、更なる授業改善を推進するため、
 - ①に関する学習を、第3回WGで検討した【知識及び技能】の①「各領域の学習の過程で生かし深める側面」の事項とする
 - ②に関する内容を、第3回WGで検討した【知識及び技能】の②「各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面」の事項とする (P4 参考資料参照)とする形で、【知識及び技能】の2つの側面を体系的に整理した学びを展開してはどうか。
- 併せて、基盤となる言語能力の育成の視点から、国語科に限らず各教科等の学習の基盤となる語句に対する児童生徒の理解を促すため、日常的に用いられる語句、教科横断的に学習で用いられる語句、教科特有の意味をもつ語句それぞれの課題を整理し、今後の指導や施策の改善に生かしてはどうか。

言葉で思考を整理したり深めたりすることに課題

○語彙を豊かにしたり、適切な語句を用いて思いや考えを表現すること（①ア）

	概要	通過率・正答率	調査等
小	思考に関わる語句の理解	 51.7%	R4状況調査
中	表現の効果を考えた描写	 49.8%	R6学力調査

○話や文章の内容や既有的知識等を整理して結び付け、考えをまとめること（①イ、ウ）

	概要	通過率・正答率	調査等
小	情報の整理の仕方の理解・使用	 59.0%	R4状況調査
		 63.2%	R7学力調査
	文章の内容理解に基づく考えの形成	 40.4%	R4状況調査
		 56.4%	R5学力調査
中	文章の内容と既有的知識を結び付けた考えの形成	 32.5%	R5状況調査
高	文章の内容と背景・他作品との関係を踏まえた深い解釈	 21.9%	R6状況調査

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」、「学力調査」は「全国学力・学習状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必履修科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象児童生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。また、異なる調査で出題した問題でも趣旨が同じである場合には、「概要」を一つにまとめて表している。

議論の前提

1. 現状

- 現行学習指導要領では、「読書」を読書の意義や効用に関する事項として〔知識及び技能〕に位置付けた。
- 司書教諭、学校司書の役割に対する理解が進み、配置数が増加している。また、ボランティア等による読み聞かせ等の活動も積極的に行われている学校もある。
- PISA2018調査では、読書を肯定的に捉える生徒の割合はOECD平均より高い。
- 一方で、「1日の読書時間が0分」の児童生徒が半数以上を占め、1か月間に読んだ本が0冊の割合も、小学生約1割、中学生約2割、高校生約5割となっており、日常的に本を読む習慣について二極化の傾向も見られる。（P10～P18 参考資料参照）

2. 課題

- 自らの興味・関心や生活の中の時間の使い方に応じて、授業外の時間も含めて継続的に読書に取り組む習慣が形成されていない。
- 学校卒業後の人生も見据えた読書習慣の形成のためには、読書への動機付けを高めるとともに、
 - ✓ 自分の読書の傾向
 - ✓ 選書の仕方や時間の使い方などを振り返りながら、自分に合った読書の在り方を考える学びが重要である。
- 一方で、〔知識及び技能〕としての読書の事項は、各領域の学習を通して指導することが基本という点が強調されるあまり、
 - ✓ 「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の領域の学習として書評合戦や読書紹介などが行われ、一時的に読みやすい本を読むにとどまる
 - ✓ 「読むこと」の領域の学習として一つの教科書教材を読んで読書の意義と効用を考えるにとどまるなど、読書を継続的な学びや生活に結び付ける指導が十分でなく、読書習慣の形成に至っていない実態も見られる。



3. 論点

- 読書を、「授業のために限られた時間で読む活動」から、「自らの興味・関心や時間に応じて考えを広げたり深めたりするために読む営み」へどのように移行させていくか。
- また、読書を通して出合った語句や表現、ものの見方や考え方を、自分の中に蓄え、次の学びや生活につなげていく力を、どのように育てていくか。

4. 改善方策

(1) 改善の方向性 ※ここでの記載はデジタルの活用を含む

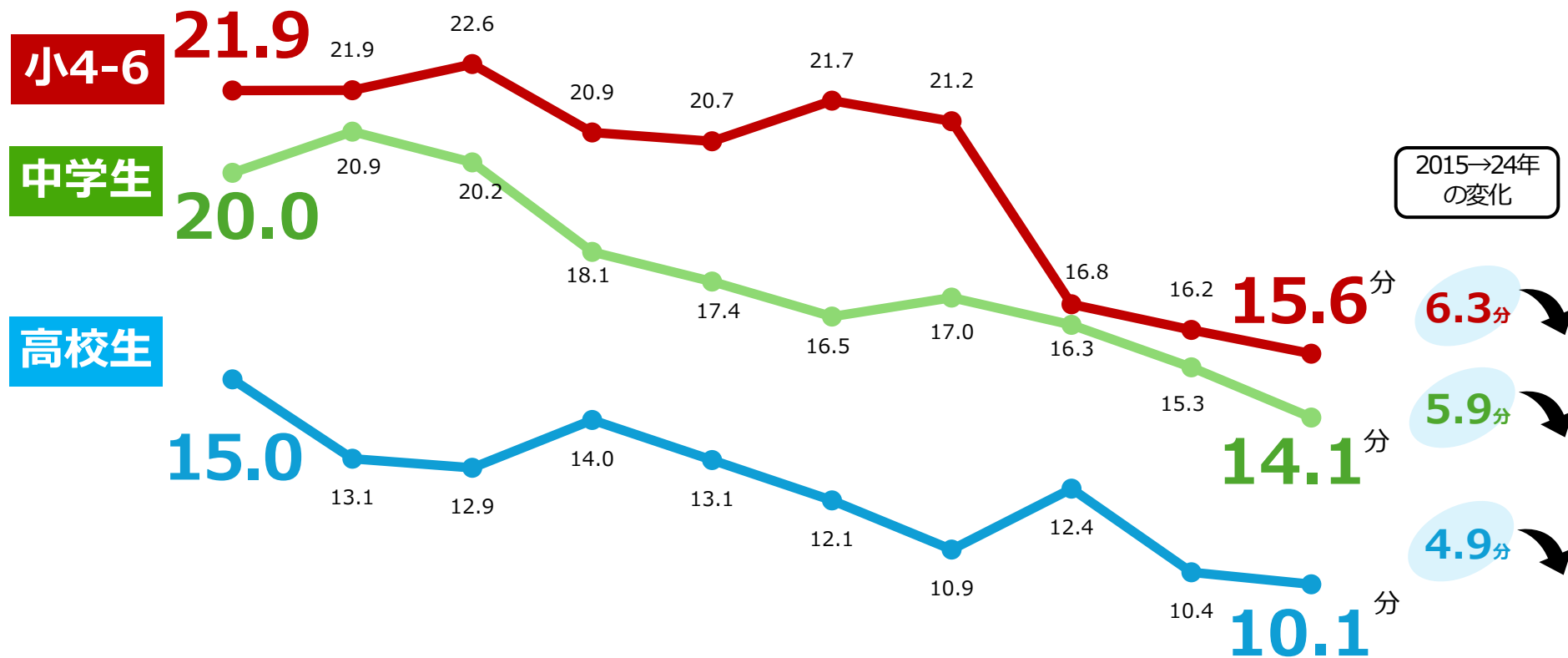
- 読書習慣の形成は、単に読む量を増やすのではなく、読書を通して楽しみながら考えを広げたり深めたりする経験を重ねることが重要。
- そのためには、授業内外をつなぎながら、自立的な読書へと移行していく学習の積み重ねが図られるよう改善してはどうか。
 - ① 読書へのきっかけの創出や動機付けを高める機会の充実
 - ・学校図書館や公共図書館等で本などと出合ったり司書等から勧められたり、自らの興味・関心や学習で生まれた問いに応じて選んだりする機会の創出
 - ・児童生徒が様々な本（電子書籍を含む）などにアクセスしやすい環境の整備（学校(学校図書館を含む)、公共図書館との連携)
 - ② 自立的な読書への移行を支える学習の充実
 - ・授業内外の時間を使って読書する「計画の立て方」や「様々な選書の仕方」を理解し、自分に合った読書の仕方を身に付けられるようにする学習を充実
 - ・読書後に、考えたこと、感じたことを伝え合い、自分の考えを確かなものにしたり、読書の意義や効用を実感したりする学習を充実
 - ・読書の足跡をデジタル等で記録し、振り返りながら、自分の読書の広がりや深まりに気付いたり、互いの読書の仕方を共有してよりよい読書の仕方を試行錯誤する学習を充実

(2) 記載の改善イメージ

- このような学習の方向性を明確にし、更なる授業改善を推進するため、①・②の方向性を踏まえ、発達段階に応じて〔知識及び技能〕の②「各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面」の事項として整理し直してはどうか。
- また、司書教諭、学校司書等と連携しながら学校図書館の機能の充実やその計画的な利活用等による学校の教育活動全体における読書環境の整備を合わせて進めていくことが重要ではないか。（P19・P20 参考資料参照）

いずれの学校段階でも読書時間は減少傾向

参考資料



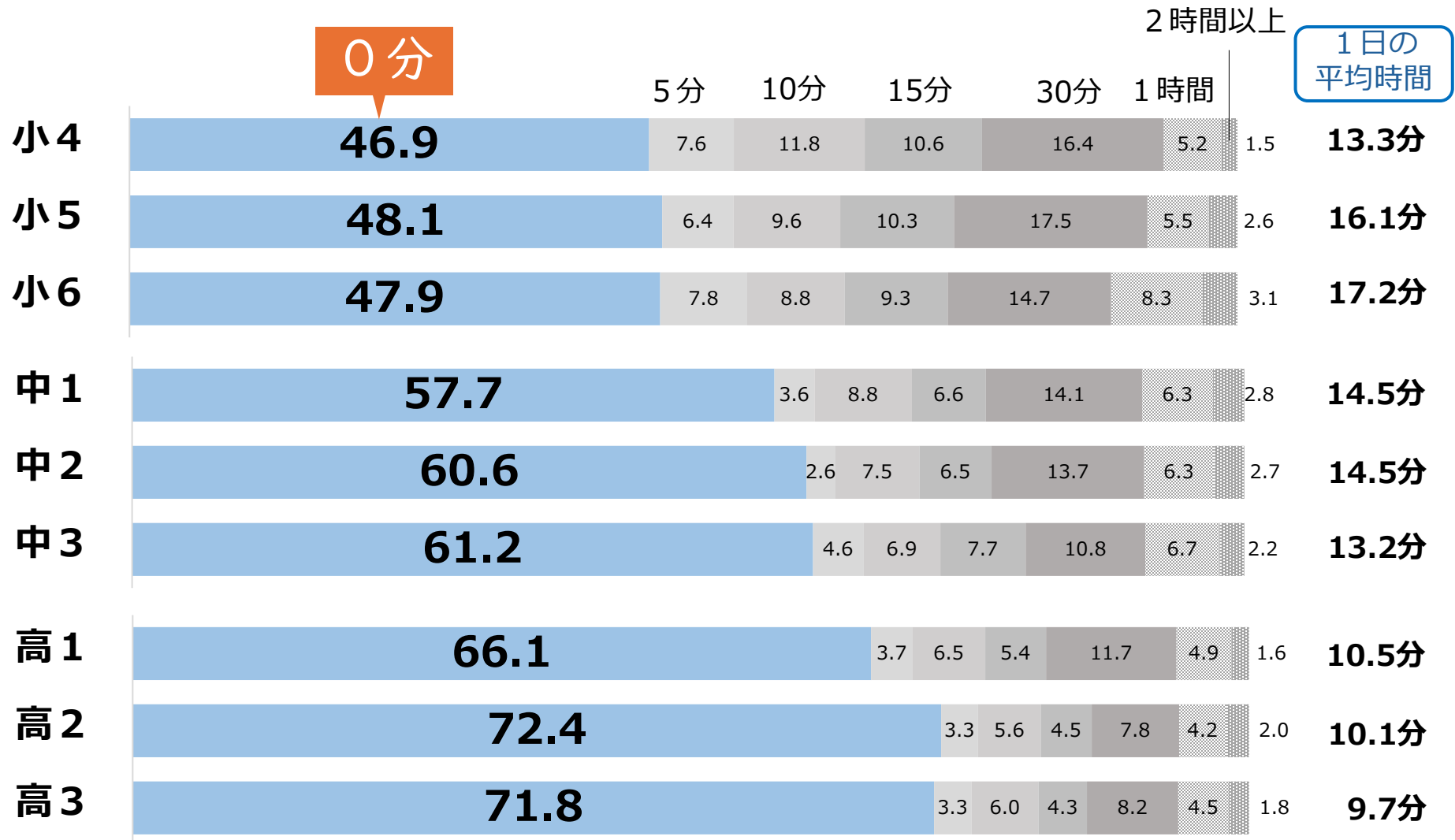
(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2024」

* 「あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか」という設問の「本を読む」に対する回答(%)。
2023年以降は「本を読む(電子書籍を含む)」。

* 「しない」は0分、「5分」から「4時間」はそれぞれ、5分から240分、「4時間以上」は300分を割り当てて平均値を算出した。

1日の読書時間が0分、半数以上

参考資料

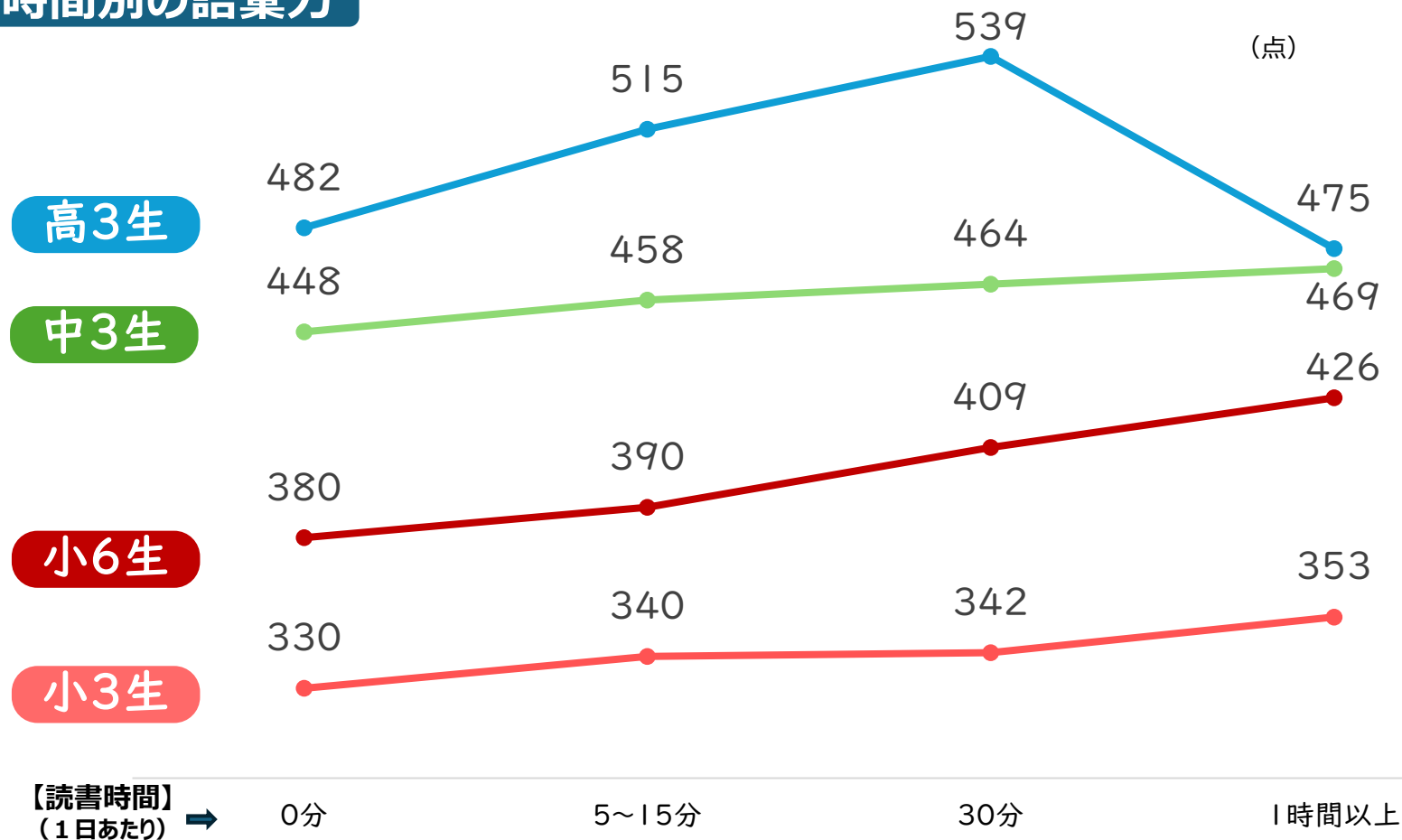


(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2024」

* 「あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか」という設問の「本を読む」に対する回答(%)。* 「2時間以上」は、「2時間」「3時間」「4時間」「4時間以上」の合計。* 平均時間は「しない」を0分として算出。

小中は読書時間が長いほど語彙力が高い

読書時間別の語彙力



(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「語彙力・読解力調査2019、2022」

* 語彙力を測定するテストを実施。項目反応理論 (IRT) を用いることで異なる学年間での比較を可能にしている。得点は、高3生の平均が500点になるように標準化した。

* 読書時間は、「しない」は「0分」、「5~15分」は「5分」「10分」「15分」の合計、「1時間以上」は「1時間」「2時間」「3時間」「4時間」「4時間以上」の合計。

* 語彙力は、小3生と小6生は2019年調査の結果 (2022年調査は未実施)、中3生と高3生は2022年調査の結果を示した。

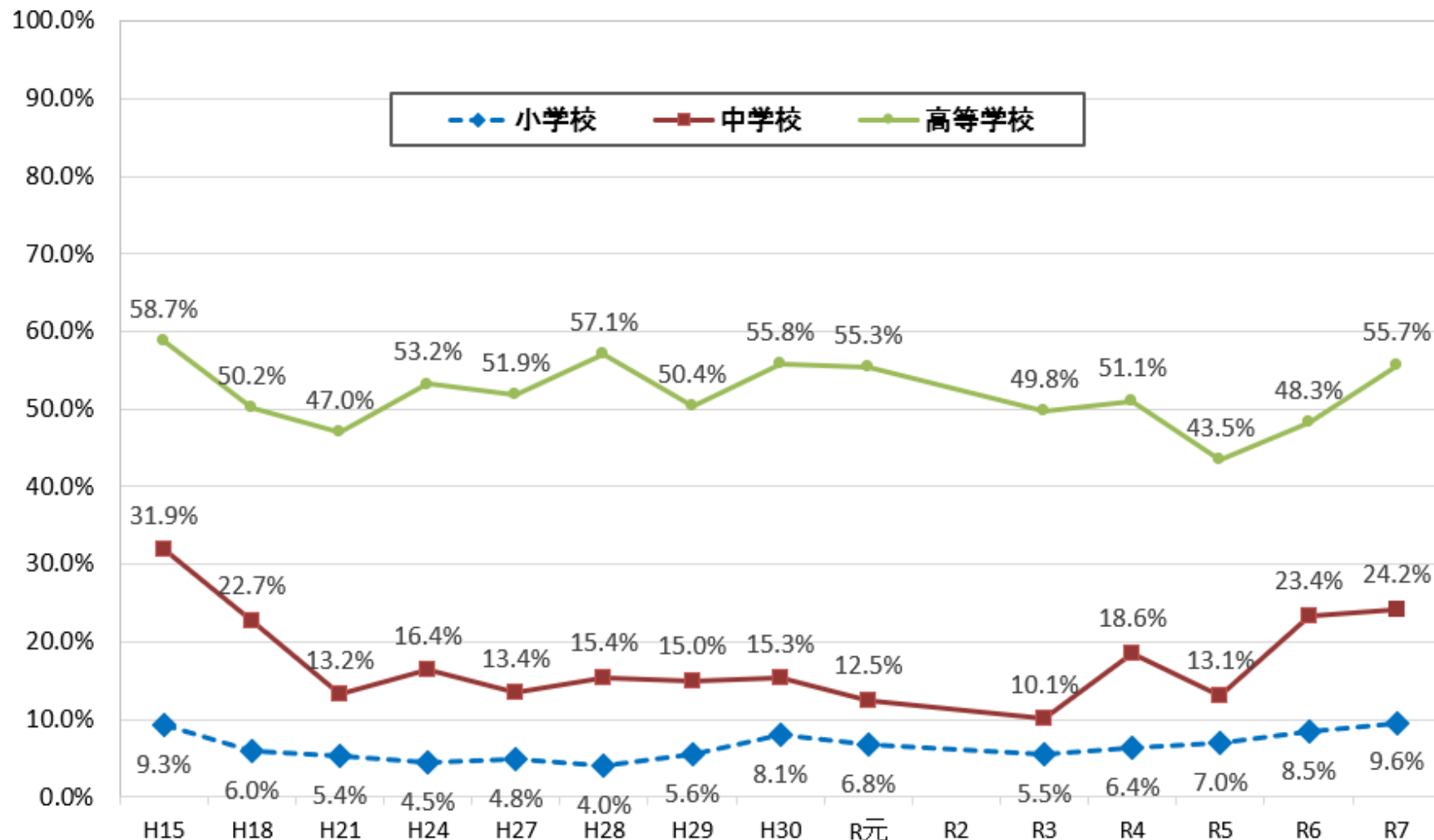
* 小3生 $p < 0.05$ 、小6生 $p < 0.001$ 、中3生 $p < 0.1$ 、高3生 $p < 0.001$ (いずれも分散分析)。

いずれの学校段階でも不読率が上昇傾向

参考資料

不読率（0冊回答者）の推移

※「不読率」：1か月に1冊も本を読まなかった者の割合



出典：学校読書調査（公益社団法人全国学校図書館協議会・株式会社毎日新聞社）

※令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、調査未実施

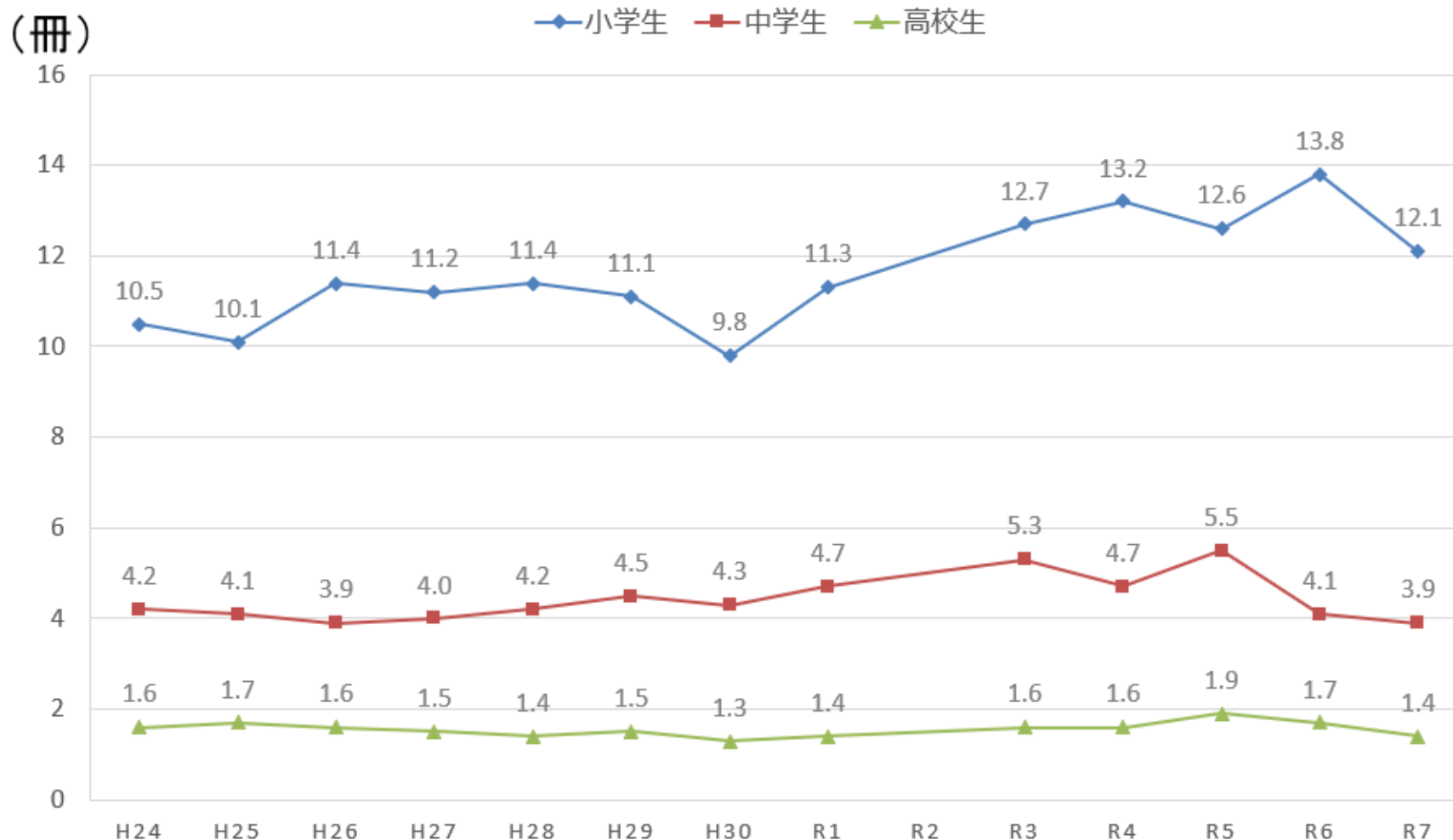
子供の読書習慣に格差が生じている可能性

参考資料

※直近の12年間で、1人当たりの読書冊数（冊／月）は、ほぼ横ばい。

一方、不読率は上昇していることから、子供の読書習慣に格差が生じている可能性が考えられる。

1人当たり読書冊数（冊／月）



出典：学校読書調査（公益社団法人全国学校図書館協議会・株式会社毎日新聞社）

※令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、調査未実施

【司書教諭の発令状況】

小学校	全体の状況	12学級以上の学校 における発令状況
国立	92.6% (100.0%)	92.6% (100.0%)
公立	69.9% (67.9%)	99.4% (99.4%)
私立	61.8% (64.3%)	87.8% (89.2%)
特区	0.0% (50.0%)	0.0% (100.0%)
合計	69.9% (68.0%)	99.2% (99.3%)

中学校	全体の状況	12学級以上の学校 における発令状況
国立	71.0% (72.6%)	95.7% (95.9%)
公立	64.3% (64.6%)	98.9% (98.9%)
私立	46.7% (68.4%)	66.7% (88.0%)
特区	- (-)	- (-)
合計	63.0% (65.0%)	97.0% (98.3%)

高等学校	全体の状況	12学級以上の学校 における発令状況
国立	64.7% (64.7%)	100.0% (100.0%)
公立	86.2% (87.0%)	98.5% (99.3%)
私立	70.9% (79.6%)	80.6% (88.2%)
特区	12.5% (10.5%)	100.0% (100.0%)
合計	81.5% (84.5%)	93.2% (96.1%)

【学校司書の配置状況】

小学校	配置学校数	全体に占める 割合
国立	40校 (42校)	58.8% (58.3%)
公立	13,051校 (11,561校)	69.1% (58.8%)
私立	109校 (115校)	46.8% (51.3%)
特区	2校 (2校)	100.0% (100.0%)
合計	13,202校 (11,720校)	68.8% (58.8%)

中学校	配置学校数	全体に占める 割合
国立	38校 (40校)	55.1% (54.8%)
公立	6,027校 (5,392校)	65.9% (57.1%)
私立	310校 (521校)	42.0% (70.4%)
特区	- (-)	- (-)
合計	6,375校 (5,953校)	64.1% (58.0%)

高等学校	配置学校数	全体に占める 割合
国立	13校 (13校)	76.5% (76.5%)
公立	2,290校 (2,349校)	66.4% (66.9%)
私立	775校 (915校)	55.2% (66.4%)
特区	1校 (2校)	6.3% (10.5%)
合計	3,079校 (3,279校)	63.0% (66.6%)

ボランティアとの連携状況

	ボランティアと連携している学校の割合	内訳（複数回答可）		
		配架や貸出・返却業務等、図書館サービスに係る支援	学校図書館の書架見出し、飾りつけ、図書の修繕等施設の整備に係る支援	読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援
小学校 (18,849校)	78.7% (14,843校)	13.8% (2,055校)	42.1% (6,254校)	91.3% (13,546校)
中学校 (9,120校)	27.9% (2,547校)	25.2% (643校)	49.9% (1,272校)	51.1% (1,302校)
高等学校 (3,436校)	2.5% (86校)	29.1% (25校)	27.9% (24校)	55.8% (48校)

◆日本を含むOECD全体の傾向

○本の種類にかかわらず、本を読む頻度は、2009年と比較して減少傾向にある。

・「月に数回」「週に数回」読むと回答した生徒の割合

(例)「新聞」: 日本21.5% (36.0ポイント減)、OECD平均25.4% (37.1ポイント減)

「雑誌」: 日本30.8% (33.8ポイント減)、OECD平均18.5% (40.4ポイント減)

○読書を肯定的にとらえる生徒や本を読む頻度が高い生徒の方が、読解力の得点が高い。中でも、フィクション、ノンフィクション、新聞をよく読む生徒の読解力の得点が高い。

◆日本の特徴

○OECD平均と比較すると、日本は、読書を肯定的にとらえる生徒の割合が多い傾向にある。

・「読書は、大好きな趣味の一つ」: 日本45.2% (3.2ポイント増)、OECD平均33.7% (0.4ポイント増)

・「どうしても読まなければならない時しか、読まない」: 日本39.3% (8.2ポイント減)、OECD平均49.1% (7.8ポイント増)

○OECD平均と比較すると、コミック(マンガ)やフィクションを読む生徒の割合が多い。新聞、フィクション、ノンフィクション、コミックのいずれも、よく読む生徒の読解力の得点が高い。

※「読書」には、本、ウェブサイト等多様な読み物を含み、デジタル機器による読書も含む。

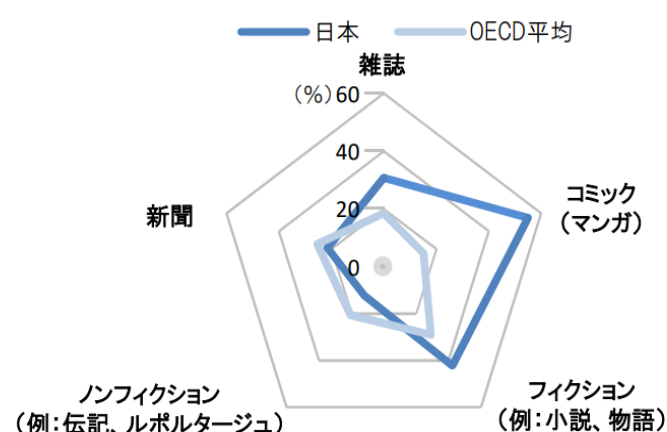
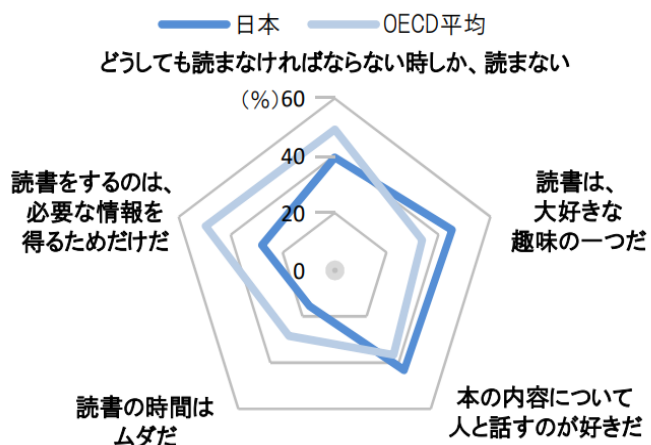
※読書や国語の授業に関する生徒への質問調査は、読解力が中心分野の時にしか行われなため、2009年調査の結果と比較。

【読書への関わり】

※「まったくその通りだ」または「その通りだ」と回答した生徒の割合
【複数回答可】

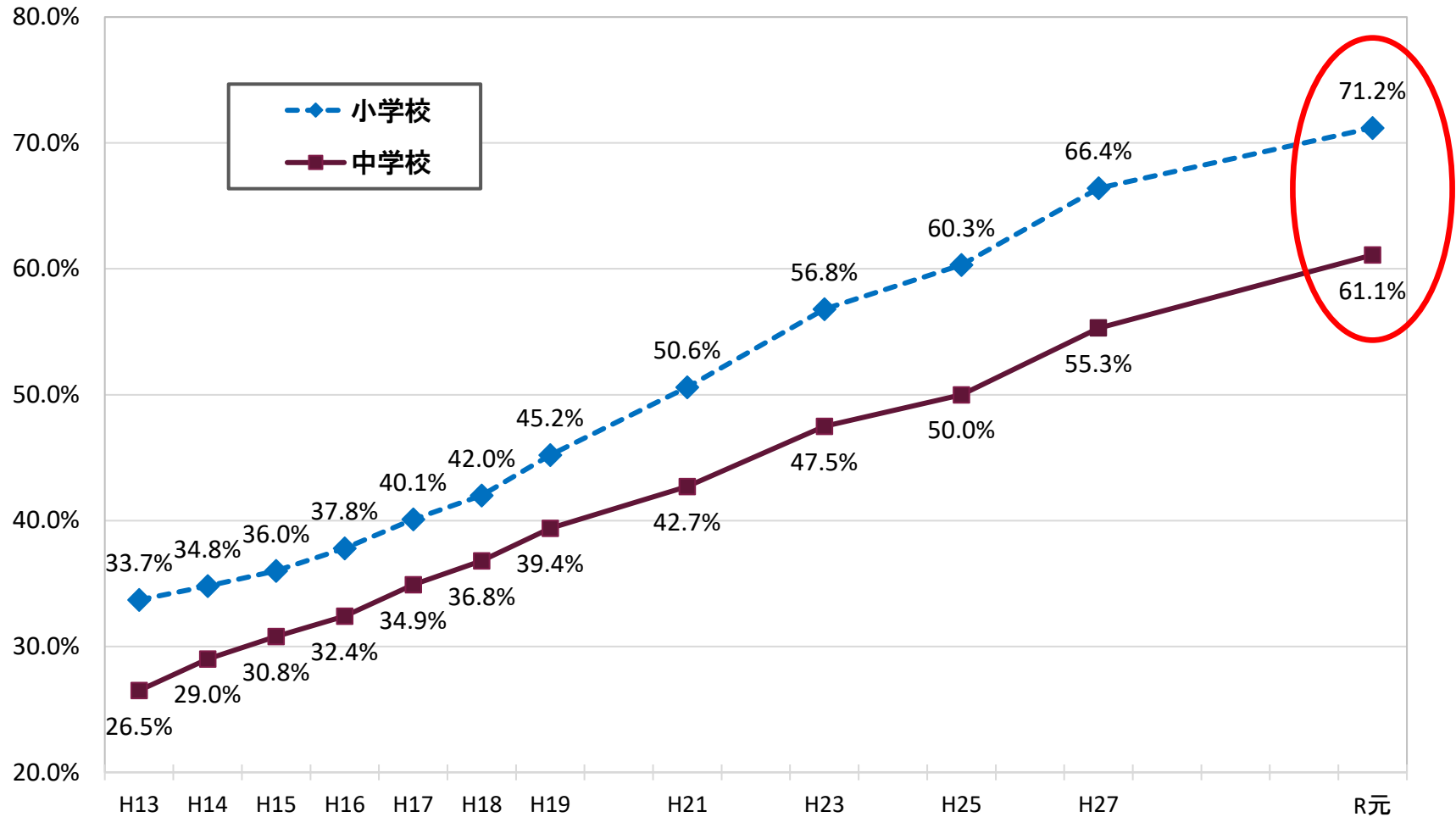
【読む本の種類・頻度】

※「月に数回」または「週に数回」と回答した生徒の割合
【複数回答可】



学校図書館図書標準の達成状況の推移 (達成している公立小・中学校の割合)

学校図書館図書標準：公立義務教育諸学校の学校図書館に整備すべき蔵書冊数の標準を、学級数に応じて定めたもの



※平成19年（調査年：平成20年）～27年（同：28年）は隔年、その後令和元年（同：令和2年）に実施

出典：文部科学省 令和2年度「学校図書館の現状に関する調査」

論点2 教科等横断的な言語能力の育成と国語科が果たす役割について

✓ 総則において、言語能力の育成のために各学校で取り組むべきことを三つの柱で整理している。

(略) 言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、生徒の言語活動を充実すること。あわせて、(7)に示すとおり読書活動を充実すること。【中学校学習指導要領（総則）より抜粋】

【柱①】言語環境の整備

- 時代の変化を踏まえて、学習指導要領解説総則編における示す内容の充実
(充実が必要な内容案)
- デジタル学習基盤に対応した内容や多様性の包摂を担保した内容

※柱①～③の内容については、現行学習指導要領を踏まえ今後の方向性として作成

【柱②】国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、言語能力を高めるための学習活動の充実

- 言語能力を育成するとともに、各教科等の指導を通して育成を目指す資質・能力を身に付けるために充実を図るべき学習活動は、今後も一層充実

【柱③】読書活動の充実

- 各教科等において、学校図書館の機能を計画的に利活用し、生徒の自主的・自発的な学習活動や読書活動を充実

※国語科での読書活動については、〔知識及び技能〕の「読書」の事項に関連して、今後のWGで検討予定

言語能力の育成のために各学校で取り組むべき三つの柱を分かりやすく示してはどうか

言語環境・学習活動・読書活動

上記三つの柱を踏まえ、言語能力の育成において国語科が果たすべき役割を分かりやすく示してはどうか

学習活動

改善方策①

- 三つの柱の関係を分かりやすく示すことで、言語能力育成の実効性を高め、言語能力の育成を一層推進
- 各教科における「教科書等を読み解く力」の確実な育成に向けては、育まれる各教科固有の言語能力に加え、各教科固有の用語や概念の理解などとの相乗効果を図ることが重要
※「教科書等を読み解く力」の育成には、各教科固有の専門的な用語や教科書の構造等の理解、既存の知識等も重要であることに留意
※外国籍・特別な支援を要するなど、多様な背景をもつ児童生徒が学びやすいよう学校全体で配慮・支援する視点を重視

改善方策②

- 国語科の学びと各教科等の学習活動の充実との関係を整理することにより、各教科等における言語能力を高めるための学習活動の充実を一層促進するとともに、言語能力を確実に育成
※中等教育では、学習する内容が高度化・抽象化し、各教科等固有の見方・考え方や語彙、表現方法・様式等を用いた思考・判断・表現が不可欠となることから、各教科等の内容と関連付けた指導が一層重要になると考えられる。(数と式による証明、音楽や美術の専門的な用語を用いた鑑賞、理科での専門的な実験の記録や報告、道徳的価値の理解を深める議論など)

【言語能力の育成のイメージ図】

言語能力の育成
※汎用的な言語能力 + 各教科等固有の言語能力（国語科固有を含む）

各教科等固有の言語能力
※各教科等の学習活動の充実により育まれる、数学的に説明する力、科学的に記述する力、道徳的価値の理解を深める議論の力など

**【柱①】
言語環境の整備**
※各学校において

【学習活動を支える土壌】
※学校全体における学習活動を支える環境

**【柱②】
言語能力を高めるための
学習活動の充実**
※各教科等の特質に応じて

数学 特別活動
総合的な学習の時間 外国語
保健体育 社会 理科 音楽

※算数・社会・理科・外国語・特活など、各教科等で行われる言語能力を高めるための学習活動（実験記録、資料の読解、議論など）は汎用的な言語能力を基盤として充実
※教科等名は一部を挙げたもの

**【柱③】
読書活動の充実**
※各教科等において

【学習活動を豊かにする糧】
※教科横断的な読書等で語彙や関連する知識を増やしたり、考えを広げたり深めたりすることで各教科等の学習活動を下支え

汎用的な言語能力
※漢字、語彙、文や文章の構成、情報の整理など
※各教科等の学習活動の充実に資する

国語科固有の言語能力
※言葉を俯瞰的に捉え分析する力、文学的創作力 など

国語科の資質・能力
※汎用的な言語能力（漢字、語彙、文や文章の構成、情報の整理などの知識や技能の運用）や国語科固有の言語能力が育成される

議論の前提

1. 現状

- デジタル技術の発展・普及に伴い、乳幼児期から様々な媒体を介して多様な情報や意見に触れる機会が増えている。
- 情報化社会の中で必要となる「話や文章に含まれている情報」を扱う資質・能力を育成するため、「知識及び技能」の内容に次の事項を新設したことにより、これらの事項に関する学習が行われるようになった。
 - ✓「情報と情報との関係」に関する事項（小1・2年以降）
 - ✓「情報の整理」に関する事項（小3・4年以降）
 - ✓情報の妥当性や信頼性の確かめ方・吟味の仕方に関する事項（中3年、現代の国語）

2. 課題

- 一方で、
 - ✓話や文章の内容と既有知識等を整理して結び付け、考えをまとめること
 - ✓話や文章に含まれる情報の信頼性や情報同士の関係の妥当性を確かめること
 について課題が見られる。（P23 参考資料参照）
- また、「情報の整理」の事項は、次の内容も網羅的に含んでおり、話や文章から取り出した情報や既有知識等を構造的に整理し、その関係を明確にして考えをまとめたり深めたりする学習をイメージすることが難しいとの指摘もある。
 - ✓引用の仕方や出典の示し方（小3・4年、中2年、現代の国語）
 - ✓辞書や事典の使い方（小3・4年）
 - ✓情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方（中3年、現代の国語）
- 情報の信頼性や妥当性を見極める力については、児童生徒の発達の段階に応じて小学校段階からの系統的な学習が必要である。



具体的論点

3. 論点

- 「情報と情報との関係を吟味し整理する力」や「情報の信頼性や妥当性を見極める力」について、児童生徒の発達段階に応じた学習の在り方をどのように整理するか。

4. 改善方策

(1) 改善の方向性

- 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する理解を深めるためには、性質の異なる二つの力を、発達の段階に応じて系統的に育成することが重要であるため、次の二つの方向性の学習を充実させることとしてはどうか。
 - ① 情報と情報との関係を吟味し整理する学習の充実
 - ・話や文章から取り出した情報や言語化した知識や経験等を、図表等を活用して構造的に整理し、情報同士の関係を明確にして考えをまとめたり深めたりする学習など
 - ② 情報の信頼性や妥当性を見極める学習の充実
 - ・情報の事実関係や主張を裏付ける根拠の適切さなどについて、インターネット検索や生成AI、学校図書館等を活用して複数の情報を参照しながら確認し、矛盾を見つけて対処する学習など

(2) 記載の改善イメージ

- このような学習の方向性を明確にし、更なる授業改善を推進するため、
 - 「情報と情報との関係」と「情報の整理」に関する内容を、小学校低学年から発達段階に応じて整理し直す
 - 「情報の妥当性や信頼性の確かめ方・吟味の仕方」に関する内容を、小学校低学年から発達段階に応じて整理し、新たな事項として示す
 その上で、これらの内容は、個別に身に付けるものではなく、話す・聞く、書く、読むといった各領域の学習において、実際の話や文章に含まれる情報を扱う過程で繰り返し活用して身に付けていくことが重要であるため、第3回WGで示した〔知識及び技能〕の①「各領域の学習の過程で生かし深める側面」の事項として整理してはどうか（P4 参考資料参照）

知識及び技能(2)情報の扱い方の事項（現行学習指導要領での記載）

	小学校			中学校			高等学校
	第1学年・第2学年	第3学年・第4学年	第5学年・第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	現代の国語
と情報と情報との関係	ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。	ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。	ア 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解すること。	ア 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解すること。	ア 具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めること。	ア 主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。 イ 個別の情報と一般化され情報との関係について理解すること。
情報の整理	—	イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。	イ 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。	イ 情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うこと。	イ 情報の信頼性の確かめ方を理解し使うこと。	ウ 推論の仕方を理解し使うこと。 エ 情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。 オ 引用の仕方や出典の示し方、それらの必要性について理解を深め使うこと。

○改訂の方向性

◆ 次のように、【情報と情報との関係】と【情報の信頼性】の二系統に整理し直してはどうか。

◆ 現行の「情報の整理」に関する事項に含まれる「引用の仕方や出典の示し方」、「辞書や事典の使い方」は、別途「知識及び技能」として再整理することを検討

小学校

【情報と情報との関係】

- ・情報と情報との関係を理解するためには、それらの関係を図や表などを用いて表すことが重要である。
- ・そこで、現行の「情報と情報との関係」と「情報の整理」の内容を、**小学校低学年から一体的に学習する内容**としてはどうか。

（例）共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解するとともに、その関係を図や表などを用いて表すこと。

【情報の信頼性】

- ・発信元や発信時期の確認など、初歩的な情報の信頼性の確かめ方について理解し使うことに重点を置いた内容としてはどうか。

中学校・高等学校

【情報と情報との関係】

- ・中学校及び高等学校の学習で扱う話や文章に含まれる情報は、小学校に比べ量の増加、質の高度化・抽象化により情報と情報との関係の複雑化が生じるため、小学校で学習した個別の「基本的な情報と情報との関係を図や表などを用いて表す」知識及び技能の特徴を理解し、**学習の目的に応じてそれらを使いこなし、複雑な関係でも整理できるようにすることが重要となる。**
- ・また、話や文章に含まれる「情報と情報との関係」については、原因と結果、意見と根拠（主張と論拠）、具体と抽象の関係に該当する情報を取り出して整理するだけでなく、**それらの適切な関係の在り方を理解し説明できるようになることが重要となる。**
- ・そこで、現行の内容を基にして、次の2つの内容を「情報と情報との関係」の内容として整理し直してはどうか。

◆ 小学校での学習を踏まえ、**情報と情報との適切な関係の在り方の理解を深め、説明できるようになることに重点を置く内容**


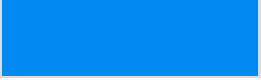
◆ 小学校及び中学校で学習する「情報と情報との関係」の理解を踏まえ、**目的に応じた情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことに重点を置く内容**

【情報の信頼性】






- ・小学校での学習を踏まえ、
- ◆ **複数の情報を比較して事実関係や裏付けとなる根拠を確認したり、その妥当性を吟味するなど社会生活で必要となる情報の信頼性の確かめ方を理解し使うことに重点を置いた内容としてはどうか。**

言葉で思考を整理したり深めたりすることに課題

○語彙を豊かにしたり、適切な語句を用いて思いや考えを表現すること（①ア）

	概要	通過率・正答率	調査等
小	思考に関わる語句の理解	 51.7%	R4状況調査
中	表現の効果を考えた描写	 49.8%	R6学力調査

○話や文章の内容や既有的知識等を整理して結び付け、考えをまとめること（①イ、ウ）

	概要	通過率・正答率	調査等
小	情報の整理の仕方の理解・使用	 59.0%	R4状況調査
		 63.2%	R7学力調査
中	文章の内容理解に基づく考えの形成	 40.4%	R4状況調査
		 56.4%	R5学力調査
高	文章の内容と背景・他作品との関係を踏まえた深い解釈	 21.9%	R6状況調査

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」、「学力調査」は「全国学力・学習状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必履修科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象児童生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。また、異なる調査で出題した問題でも趣旨が同じである場合には、「概要」を一つにまとめて表している。



議論の前提

1. 現状

- グローバル化が進展する社会においては、国際社会に対する理解を深めるとともに、自らのアイデンティティーを見極め、先人が築き上げてきた伝統と文化を尊重し、我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を活用する資質・能力の育成が必要である。
- 平成28年中央教育審議会答申において、「引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」とされたことを踏まえ、現行学習指導要領においては、「我が国の言語文化に関する事項」を整理し、その内容の充実を図った。

2. 課題

- 一方で、次のような点に課題が見られる。
 - ✓ 小・中学校（親しむ中心）の学びと高等学校（深く読む）の学びとの接続が不十分なことにより、高等学校において古典への学習意欲が高まらない生徒が多い
 - ✓ 高等学校において、文語文法の習得に偏重した指導、口語訳ができることを到達点とする授業が依然として多く、古典の学習において、言語文化への理解を深めるという観点弱い
- また、我が国の言語文化や古典作品の背景にある歴史的・文化的文脈を理解することを示す指導事項と、古典を読むために必要な言語のきまりといった読むための基礎となる事項が同列に並べられており、「文化的理解」を支えるための「言葉のきまり」が学習目標として受け取られ、古典学習が形式的・技能中心の学習に偏重している。



具体的論点

3. 論点

- 小・中学校（親しむ中心）の学びと高等学校（深く読む）の学びとの接続が不十分であることをどのように改善するか
- 高等学校の文語文法の習得に偏った指導や口語訳中心の授業をどのように改善するか
- 言語文化への理解を深める学習を、どのように充実させるか

4. 改善方策

(1) 改善の方向性

- 古典を身近で親しみのあるものとして捉え、主体的に関心をもつことを重視し、言語文化への理解を深めるため、次の方向性の学習を充実させることとしてはどうか。
 - ① 小中と高等学校の学びの接続強化：小・中学校で形成された古典への親しみを基盤とし、古典を自分の経験や身近な出来事と結び付けて考えるなど、高等学校における古典学習の出発点としての古典に親しむ学習を充実
 - ② 文語文法及び口語訳の指導の偏りの見直し：古典作品の内容を理解し解釈を深めることに主眼をおき、文語文法の習得や口語訳は、作品理解を支える手段として位置付ける学習の充実
 - ③ 言語文化への理解を深める学習の充実：言語文化や古典作品の歴史的・文化的背景を古典を読む基盤とし、作品の内容や表現を自分の経験や現代の言語生活と結び付けながら理解するなど、言語文化への理解を深める学習の充実

(2) 記載の改善イメージ

- このような学習の方向性を明確にし、更なる授業改善を推進するため、
 - 小・中学校での学びの継続性を重視した「伝統的な言語文化に親しむ」ことを、第3回WGで示した「知識及び技能」の②「各領域の学習を支える文化的な知識や態度、教養として深める側面」の事項として示す
 - 古典を読むためのことばのきまりは、第3回WGで示した「知識及び技能」の①「各領域の学習の過程で生かし深める側面」の事項として示す
 - 文化的な知識を深め、態度を養う内容は、「知識及び技能」の②「各領域の学習を支える文化的な知識や態度、教養として深める側面」の事項として示す（P4 参考資料参照）

現行学習指導要領での記載

(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	
伝統的な言語文化	ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。
	イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。
	ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。

【改善のイメージ】

- ・〔知識及び技能〕の側面（仮称）①に「古典を読むための言葉のきまり」を、〔知識及び技能〕の側面（仮称）②に「我が国の伝統的な言語文化」を設ける
- ・「古典を読むための言葉のきまり」に、文語のきまりや訓読のきまりについての事項を位置付ける
- ・「我が国の伝統的な言語文化」に、古典に親しむことについてや言語文化や古典作品の歴史的・文化的背景を理解することについてを位置付ける

改訂後のイメージ

次のように整理し、それぞれの学習を充実するための内容を位置付けてはどうか。

〔知識及び技能〕の側面（仮称）①

各領域の学習の過程で生かす深める側面	古典を読むための言葉のきまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文語のきまりや訓読のきまりを作品理解を支える手段として位置付ける学習
--------------------	----------------	--

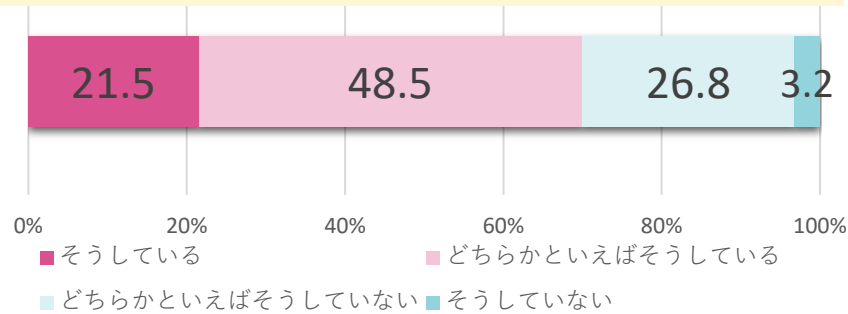
〔知識及び技能〕の側面（仮称）②

各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面	我が国の伝統的な言語文化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な事象などを、言語文化の文脈の中で考えを深め自分のこととして捉えることで、伝統的な言語文化に親しむ学習 ・ 古典を読む基盤として言語文化の歴史的・文化的背景などを理解する学習 ・ 言語文化への理解を深めるための我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係についての学習
-------------------------------	--------------	--

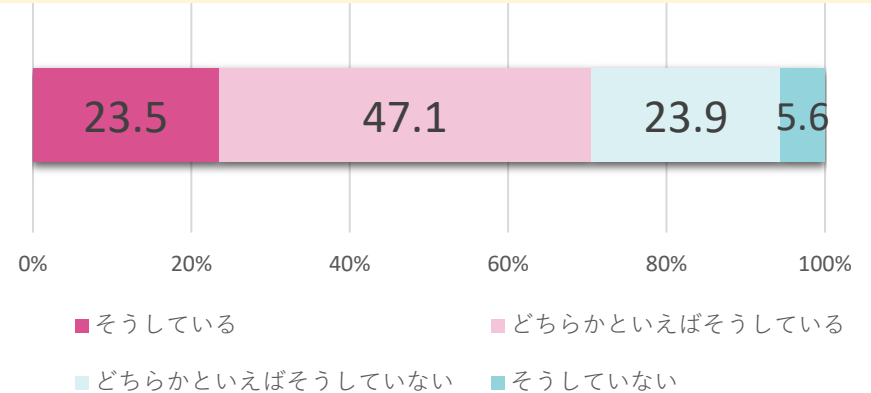
(教師用)



質問項目：
「読むこと」の近代以降の文章に関する指導については、我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章や古典に関連する近代以降の文学的な文章を活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫している



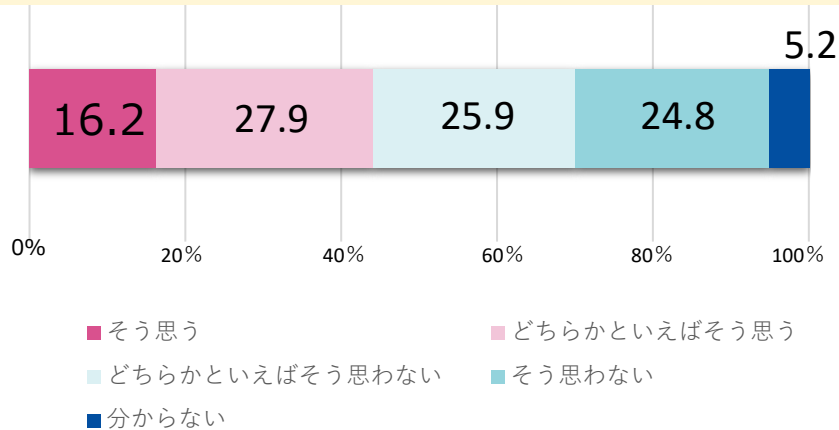
質問項目：
「読むこと」の古典に関する指導については、古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導している



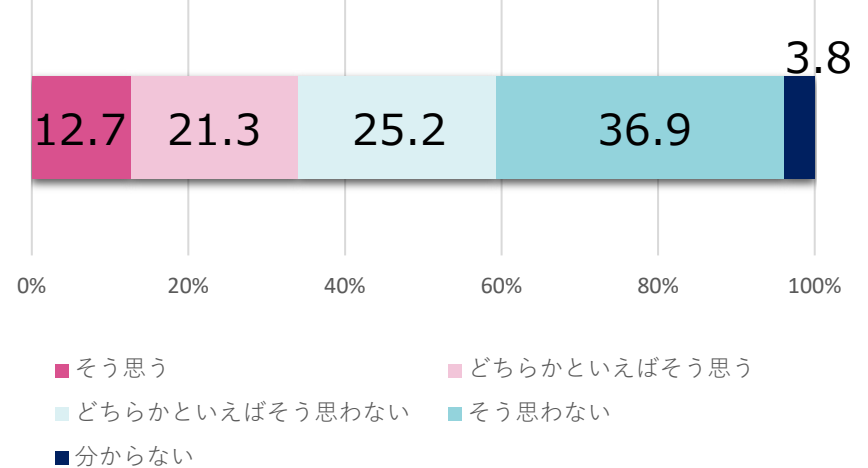
(生徒用)



質問項目：古文や漢文の学習は大切だ





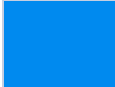
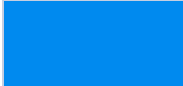
質問項目：古文や漢文は好きだ



※オンライン質問調査は、高等学校第3学年（必修科目で実施）を対象としている。
なお、結果は速報値であり確定値ではない。

我が国の言語文化を継承・発展させる態度の形成に課題

○我が国の言語文化の特質を理解し、その担い手として継承・発展させる態度（①才）

	概要	通過率・正答率	調査等
小	古典の言葉の響きやリズムに親しむ	 56.8%	R4状況調査
中	古典の一節を引用して使用	 40.6%	R5状況調査
高	時代背景等を踏まえた古典の解釈	 21.9%	R6状況調査
	我が国の言語文化としての古典の理解	 35.4%	

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必修科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。